

リベラリズムと儒教の比較：中国の政治 的近代化の問題を展望する

にゅう げいびん
牛 革平

論文要旨

30 年来の改革によって中国は世界第二位の経済強国となった。しかし、その非民主主義的な政治制度への批判は国内外でますます高まっている。改革の時代を通じた中国の政治思想の変動をみたとき、リベラリズムと儒教という二つの政治哲学の伝統の復活がみてとれる。本論文の研究目的は、「中国においてどのようにしてリベラリズムと儒教とが統合され、政治改革の哲学的な基礎となったのか」という問いを探求することである。本論文の構成は以下のとおりである。

第一部では、リベラリズムと儒教を比較する。第一章はこの二つの政治理論の相違点を考察する。主な相違点は二点ある。第一に、リベラリズムにおける権利と、儒教における美德という中心的な概念の相違である。権利は平等に個人に与えられているのに対し、美德は治めることである。第二に、リベラリズムは社会契約によって立憲国家の建設を主張するのに対し、儒教は聖人や道徳の優れた官僚による徳政を主張する。第二章では、この二つの政治理論の類似点を探求する。リベラリズムの権利概念も儒教の美德概念も、人間性における平等を主張し、社会関係における相互主義を掲げている。さらに、双方において、個人と国家と人民との間に弁証法的な関係がみられる。第三章はリベラリズムと儒教との道徳哲学としての類似性を検討する。両方とも個人のレベルに人間性の原理、公共性や政治のレベルに正義の原理を掲げていることを明らかにする。

第二部では、近代国民国家と古代中国国家の二つのモデルを比較する。この二つのモデルは中国の政治的近代化の参照項となり、かつリベラリズムと儒教の歴史的な背景でもある。比較の結果として、近代国民国家と古代中国国家は「合法的な暴力の独占」という点で類似するが、本質的に異なる政治暴力の二つの類型であることを述べる。

以上の比較研究の結果に基づいて、結論では、中国の政治的近代化の本質的な問題は何か、その問題を解決するために、リベラリズムの民主、自由、法による統治等の概念をどのようにして中国の伝統的な政治思想としての儒教に取り入れるかといった問いに解答を与えた。